

紆余曲折、韓国滞在 10 年記

第 2 回 大使館編 -それは突然の電話から始まった-

専門調査員 一貧乏研究者から外交官の末席に一

執筆で籠っていた旅館に突然、電話がかかって来ました。電話から聞こえる声は、共に韓国語を学んだソウル支局の記者さんのものでした。「日本大使館で専門調査員を探しているから、面接を兼ねてソウルに来ないか」という誘いでした。翌週、ソウルの日本大使館を訪ね、試験と面接に臨みました。帰国後、驚いたことに、なんと採用との連絡がありました。一本の電話から始まり、まるで狐に騙されたように話がトントンと進んでいき、二か月後には外務省から準外交官のパスポートが発行されました。1989 年 8 月に専門調査員としてソウルの日本大使館に赴任、再び韓国の地を踏むことになりました。

政治部 一日韓外交生き字引の人々と共に一

大使館では政治部に配属されました。韓国語や英語の達人、様々な国との外交交渉に携わったベテラン、警察からの派遣者、京城帝国大学出身の現地職員など、この政治部には錚々たる人が集められていました。初めは朝夕刊 7 紙から、内政や日本に関する記事を選び、現地職員と共に訳すという仕事を託されました。現在はインターネットを通じて日本語サイトで翻訳文が見られますが、当時は辞書を片手の翻訳でした。そして何人かの手によって訳され、書かれ、校正された手書きの文をワープロで打ち直し、「読んでもらえる」ものに直します。当初は政治用語や独特の言い回しに戸惑い、失敗もありましたが、翻訳と要約のコツのようなものを徐々につかんでいきました。時間がある時には、現地職員にワープロを教えたりもしました。

翻訳以外にも、資料作成、新聞や雑誌の論調分析、会談内容のメモ取りと要約、訪問者の対応、日本から来韓された方のアテンドなど、仕事は多岐にわたり、帰宅が深夜になることも多々ありました。

日々先輩方から適切な指導を受け、徐々に大使館での仕事にも慣れていきました。その後、車を手に入れ、週末は地方の寺院や史跡、博物館を巡り、古代美術の研究も進めていました。このころから美術史論文の翻訳や雑誌への連載文の翻訳なども依頼されるようになり、研究面でも充実した時期でした。

仕事柄、国益がぶつかり合う外交の場面にも遭遇することができました。当時は、日韓定期閣僚会談、外務大臣や日韓議員連盟の訪韓もしばしばあり、「ロジ担」として外交の下支えに携わることができました。

大使館では要人訪問がある際は、部を超えてチームで対応します。

俗に言う「サブ」と「ロジ」です。「サブ(サブスタンス)」は会談の内容(議題や発言要領)

を、「ロジ(ロジスティック)」は後方支援(出入国、会場や移動の準備、随行記者対応等)を意味します。また「ロジ担」は相手国側との事務的な折衝も担当します。「ロジブック」を作り、当日の行事や会談における担当者の動き、移動、配車、車列など様々な情報を盛り込んでいきます。当日は厚いロジブックを抱え、空港やホテルを駆けずり回っていました。総理訪韓も2回経験しましたが、大使館員全員で一丸となり、一大行事をやり遂げた後の充実感は格別のものがありました。それに加え、私は歴史と古代美術を学んだこともあり、要人の奥様と行動を共にすることも多々ありました。病院や学校訪問、史跡や博物館の案内、韓国文化の体験、食事会など婦人外交のお手伝いをさせていただきました。

大使館の仕事は派手なものと思われがちですが、ほとんどが地味なものの連続です。日々の公開情報収集の他に、政府機関の担当者との連絡調整と良好な人間関係の構築など日頃からの関係が重要で、いざという時に腹を割って意見をぶつけ合う関係作りが求められます。

日韓間には、その時代ごとに様々な問題が持ち上がり、マスコミも燃え上がるように反日一色になってしまいます。当時から、記者会見と称して大使館前でデモや抗議をする団体もあり、生卵を投げ込まれたり、大使館前で狂言切腹をするような事件にも遭遇しました。私がいた時期は日韓が比較的良好的な関係にありましたが、大使館勤務は刺激的な毎日でした。

広報文化院 — 日本文化の紹介 —

1991年に政治部から希望していた広報文化院に転じました。日本に関する公開情報の収集や分析の他に、日本映画の上映、日本文化の紹介、文化使節の受入れ、そして地方自治体の交流などを担当することになりました。

今では想像もできないでしょうが、日本の歌やテレビ番組は放送禁止、日本映画や演劇の上映も特別な場合を除き禁じられていました。「日本大衆文化への鎖国策」と言っても過言ではありませんでした。唯一残されていたのが日本語で歌うことのないクラシック音楽の演奏会でした。

土曜日の午後は、広報文化院のホールで日本映画の上映を行います。毎回、多くの方が訪れてくれました。開館と同時に「紅白歌合戦」のビデオを流します。公的な場所では、日本の歌謡曲はここでしか聞

시이하시 부레도지,
30대의 미혼인 그는 한국이 실력이 상당하고 한국의 고대 미술에 대해서 열광하고 있다.
동경 세이조대학에서 동양학을 전공한 그는 7~8개월 동안에 관한 연구를 하느라 주한 주사관에 대해 관심을 갖게 되고 한국에 올 기회가 많았다고 한다.

부사님 공부는 그가 50여 차례도 더 거론 것이다.
80년 대학원을 졸업하고 연세대학교에서 한국학을 석사학위 취득한 그는 한국이 실력도 상당하고 한국의 고대 미술에 대해서 열광하고 있다.
동경 세이조대학에서 동양학을 전공한 그는 7~8개월 동안에 관한 연구를 하느라 주한 주사관에 대해 관심을 갖게 되고 한국에 올 기회가 많았다고 한다.

그가 주사관에 대해서 열광하는 일 한 가지.
정음 체재했던 80년에는 우리 국민 모두가 외국의 요리를 가지고 요리하는 열광하는 열광을 아사하시 느낄 수 있었는데 요즘은 그렇지 않다.
그는 요리를 좋아하고 정음 체재했던 80년에는 우리 국민 모두가 외국의 요리를 가지고 요리하는 열광하는 열광을 아사하시 느낄 수 있었는데 요즘은 그렇지 않다.
이러서인지 아사하시 역시 요리로 바쁜 요리가 이제 20년 경력이 된다고 자랑이다. 대학 시절 전공연구 때문에 일본의 고대 미술(고대 미술)의 필요성도 연구하는 데 있어서 6개월 정도 있을 때 그 때 보냈다는 것으로 동료 몇 유적을 찾아 다니고 찾아온 주한 주사관에게 부탁한 요리법을 전수 받았다.
그는 일본의 요리와 요리 솜씨도 자랑이다. 요즘은 가끔 한국에서도 시도를 해보는데 아직은 쉽지 않다. 김치찌개나 된장찌개는 자랑하는 자랑이다. 요리 전에는 취미 김치를 달다 싶어해서 재밌게 먹는 다.
그의 요리법을 아는 동료들은 가끔 저녁 등 약간의 요리로 제공하고 있다. 한식을 요리 제공을 제공하고, 시은 다사하시 시에 들을 결혼을 생각할 때가 아니라 결혼에 좋은 아사하시 만년 만년이다 할 것이다

Something
요리솜씨로 소문난 주한 일본총각
시이하시

사랑과 요리에 국경이 없습니다

韓国の雑誌に、料理好きの大使館員として取り上げられた記事。
見出し「料理の腕で評判、日本の独身」、「愛情と料理に国境はない」

くことが出来ませんでした。上映できる映画のリストは少なかったものの、「男はつらいよ」シリーズは必ず満員札止めの盛況でした。アニメ「紅の豚」を上映した際は、ロコミで噂が広がり、学生さんが大挙押し寄せ、上映期間を延ばしたほどでした。残念ながら日本映画の全面解禁は2004年まで待たねばなりません。ドラマの地上波放送はいまだに実現していません。

地方自治の復活 一次なる展開への序章

当時、韓国では知事や市長を選ぶ首長選挙がなく、中央の内務部職員が派遣される官選首長の時代が長く続いていました。大使館には自治省(当時)からの派遣者がいないことから、私が地方自治担当となり、韓国内務部との折衝にあたることになりました。当初、内務部と自治省は、内政を主とすることから他の省庁に比べて接点は多くありませんでした。しかし、韓国で1995年6月に地方自治が復活することが決まり、韓国内務部は日本の地方自治に関する制度や経験へ非常に高い関心をもっていました。まずは人的交流から始まりました。自治省と内務部職員との交流が毎月のように行われ、情報交換はもとより人的関係の構築も日に日に深まっていきました。

次官を代表とする相互訪問団の派遣や部門ごとの専門セミナーや視察の実施なども行われるようになって行きました。後の話ですが、当時の担当課長さんが、県知事や道知事になられ、様々な分野と世代にわたる交流が深まり、ついに姉妹関係締結にまで進んだこともありました。

初の知事会議開催

そんな折、九州北部3県が海峡を挟んだ韓国自治体との知事会議を希望していることから、その業務を担当することになりました。

しかし、当時の韓国は内務部の職員が首長となる官選知事の時代でした。自治省や九州北部3県の担当者と内務部担当者との意見交換の通訳や連絡調整など、初めての知事会議開催に向けて地道な仕事が日々続いていきました。韓国側では民選知事が選出されたら実施したいとの意見が多数を占めていました。何度も諦めかけましたが、当時の自治省の方の強い熱意、またその頃には互いに気心のしれた内務部職員の努力もあり、1992年8月25日に済州島で日韓初の知事会議開催にこぎつけました。

会議の名称は海峡を挟んだ地方自治体同士なので「日韓海峡沿岸県市道知事交流会議」(日本側)と「韓日海峡沿岸市道県知事交流会議」(韓国側)と決まりました。この会議は2015年で23回を数え、多くの交流部会も派生しています。

日韓の地方自治体の交流において、微力ながら自分の足跡が残せたと少々自負できる仕事でした。

外務省との契約は1年毎でしたが、とうとう最終の4年目に入りました。年々盛んになってきた文化交流と観光客の往来、日本の地方自治体のソウル事務所も開設され始め、地方自治体の派遣職員との交流や支援も日々増して来ました。そんな折、自治体国際化協会(CLAIR)がソウルに事務所を設立したいので、力添えをしてほしいとの依頼を受けました。また韓国での勤務が続くことになるとは、その当時は予想もしていませんでした。

つづく